

# より実践的な英語科教育法への試案： 短期大学における教科教育法から実習への橋渡し

日 高 佐 紀 子

## 0. はじめに

この論文では the method と言われるような、これといった特定の教授法が無い今日、教員を目指す学生に限られた時間の中で何を与えるべきか、また実習をすぐ後にひかえて、どのようにすればもっと実践と理論を噛み合わせた効率良い授業が出来るのかを考えていく。

英語科教育法が2年生の前期にしかない本学では、夏休み明けには実習に行く。100分授業13回ほどの中で、英語教育理論・指導法・指導技術を組み込まねばならないとすれば内容の精選は必定である。また、筆者がこの論文を書くもうひとつのきっかけとなったものに、学生たちの感想がある。実習から帰ってきた学生たちは、「私達が中学時代に習った授業と全然違う」というのである。よく「人は教師になった時、自分が教わった通りの教え方をしようとする」という。例にもれず学生達にデモンストレーションをさせると説明や訳の多い授業になる。つまり、今では「自分が習った形式で教えることはできない」と感じるのは年をとった人ではなく、中学を卒業してまだ5年の短大生なのである。

これに対し、現場からのコメントにも「受験ではないのだから…」とか「説明が多くて、生徒が英語を口にする時間が短い」といったようなものが目立つ。ますます、使える英語、生きた英語、コミュニケーションのための英語を身につけた教師が必要な時代になったのだと痛感する。

筆者はこの機会に教育法も見直さなければならないのではないかと考えた。現場は実習生に何を求めているのか、絞るとすれば、教えられねばならない理論はどれなのか、どうしたら理論と実践、授業と実習がより近いものとなるのか。これらについて以下、論を進める。

## 1. これからの英語教育の目的

日本における学校教育の目的を見るには、やはり学習指導要領が最も確実であろう。平成5年4月1日から実施される「新学習指導要領」にはコミュニケーションや国際理解の重視といった現代社会のニーズが顕著にあらわされている。具体的に何処がどう変わり、現場は何を目標とすべきなのだろうか。以下の表で比較してみよう。(下線は新しく変えられたもので、筆者が特に注意した方が良いものとして引いたもの。)

項 目	現 行	新学習指導要領
目 標	1. 外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養う。 2. 言語に対する関心を深める。 3. 外国の人々の生活やものの見方などについての基礎的な理解を得させる。	1. 外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養う。 2. <u>外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。</u> 3. 言語や文化に対する関心を深め、 <u>国際理解の基礎を培う。</u>
領 域	1. 聞くこと・話すこと 2. 読むこと 3. 書くこと	1. <u>聞くこと</u> 2. <u>話すこと</u> 3. <u>読むこと</u> 4. <u>書くこと</u>
聞くこと ・ 話すこと の目標	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px; width: fit-content;">第1学年</div> <p>初歩的な英語を用いて、簡単な事柄を聞いたり話したりすることができるようにさせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px; width: fit-content;">第2学年</div> <p>初歩的な英語を用いて、事柄の概要をとらえながら聞いたり話したりすることができるようにさせる。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px; width: fit-content;">第1学年</div> <p>〔聞くこと〕  <u>身近で簡単なことについて話される初歩的な英語を聞いて理解できるようにするとともに、英語を聞くことに親しみ、英語を聞いて理解することに対する興味を育てる。</u></p> <p>〔話すこと〕  <u>初歩的な英語を用いて、身近で簡単なことについて話すことができるようにするとともに、英語で話すことに親しみ、英語で話すことに対する興味を育てる。</u></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px; width: fit-content;">第2学年</div> <p>〔聞くこと〕  <u>初歩的な英語の文や文章を聞いて、話し手の意向などを理解できるようにするとともに、英語を聞くことに慣れ、英語を聞いて理解しようとする意欲を育てる。</u></p> <p>〔話すこと〕  <u>初歩的な英語の文や文章を用いて自分の考えなどを話すことができるよう</u></p>

	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">第3学年</p> <p>初歩的な英語を用いて、事柄の要点をとらえながら聞いたり話したりすることができるようにさせる。</p>	<p>にするとともに、英語で話すことに慣れ、英語で話そうとする意欲を育てる。</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">第3学年</p> <p>〔聞くこと〕 初歩的な英語の<u>文章</u>を聞いて、<u>話し手の意向などを理解</u>できるようにするとともに、英語を聞くことに習熟し、英語を聞いて<u>理解しようとする積極的な態度</u>を育てる。</p> <p>〔話すこと〕 初歩的な英語の<u>文章</u>を用いて<u>自分の考えなどを話す</u>ことができるようにするとともに英語で話すことに習熟し、英語で話そうとする<u>積極的な態度</u>を育てる。</p>
<p>読むこと の目標</p>	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">第1学年</p> <p>簡単な事柄について書かれている初歩的な英語の文を読むことができるようにさせる。</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">第2学年</p> <p>書かれている事柄の概要をとらえながら、初歩的な英語の文を読むことができるようにさせる。</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">第3学年</p> <p>書かれている事柄の要点をとらえながら、初歩的な英語の文を読むこと</p>	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">第1学年</p> <p>身近で簡単なことについて書かれた初歩的な英語を読んで<u>理解</u>できるようにするとともに、英語を読むことに<u>親しみ、英語を読んで理解することに対する興味</u>を育てる。</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">第2学年</p> <p>初歩的な英語の<u>文や文章</u>を読んで、<u>書き手の意向などを理解</u>できるようにするとともに、英語を読むことに<u>慣れ、英語を読んで理解しようとする意欲</u>を育てる。</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">第3学年</p> <p>初歩的な英語の<u>文章</u>を読んで、<u>書き手の意向などを理解</u>できるようにする</p>

	<p>ができるようにさせる。</p>	<p>とともに、英語を読むことに<u>習熟し</u>、<u>英語を読んで理解しようとする積極的な態度を育てる。</u></p>
書くこと の目標	<p><b>第1学年</b></p> <p>初歩的な英語を用いて、簡単な事柄について文を書くことができるようにさせる。</p>	<p><b>第1学年</b></p> <p>初歩的な英語を用いて、身近で簡単なことについて書くことができるようにするとともに、<u>英語で書くことに親しみ、英語で書くことに対する興味を育てる。</u></p>
	<p><b>第2学年</b></p> <p>初歩的な英語を用いて、事柄の概要が伝わるように文を書くことができるようにさせる。</p>	<p><b>第2学年</b></p> <p>初歩的な英語の<u>文や文章</u>を用いて<u>自分の考えなど</u>を書くことができるようにするとともに、<u>英語で書くことに慣れ、英語で書こうとする意欲を育てる。</u></p>
	<p><b>第3学年</b></p> <p>初歩的な英語を用いて、事柄の要点が伝わるように文を書くことができるようにさせる。</p>	<p><b>第3学年</b></p> <p>初歩的な英語の<u>文章</u>を用いて、<u>自分の考えなど</u>を書くことができるようにするとともに、<u>英語で書くことに習熟し、英語で書こうとする積極的な態度を育てる。</u></p>

言語活動

項目	現 行	新学習指導要領
聞くこと ・ 話すこと	<p><b>第1学年</b></p> <p>(ア)話題の中心をとらえて、必要な内容を聞き取ること。 (イ)簡単な事柄について話そうとする</p>	<p><b>第1学年</b></p> <p>〔聞くこと〕 (ア)語句や文の意味を正しく聞き取ること。</p>

事柄を整理して、大事なことを落とさないように話すこと。

(ウ)簡単な事柄について、相手の意向を聞き取って、的確に話すこと。

第2学年

(ア)話題の中心をとらえて、事柄の概要として必要な内容を聞き取ること。

(イ)話そうとする事柄を整理して、事柄の概要として大事なことを落とさないように話すこと。

(ウ)相手の意向の概要を聞き取って、それに応じた事柄の概要を的確に話すこと。

第3学年

(ア)話題の中心をとらえて、事柄の要点として必要な内容を聞き取ること。

(イ)話そうとする事柄を整理して、事柄の要点として大事なことを落とさないように話すこと。

(ウ)相手の意向の要点を聞き取って、それに応じた事柄の要点を的確に話すこと。

(イ)質問、指示、依頼、提案などを聞いて適切に応ずること。

(ウ)数個の文の内容を聞き取ること。

〔話すこと〕

(ア)語句や文をはっきりと正しく言うこと。

(イ)あいさつ、質問、指示、依頼などに適切に应答すること。

(ウ)伝えようとすることを簡単な文で話すこと。

第2学年

〔聞くこと〕

(ア)自然な口調で話されたり読まれたりする文や文章の内容を聞き取ること。

〔話すこと〕

(ア)相手の言うことを聞き取って適切に質問したり应答したりすること。

(イ)聞いたり読んだりしたことについて問答すること。

第3学年

〔聞くこと〕

(ア)まとまりのある文章の概要や要点を聞き取ること。

〔話すこと〕

(ア)話そうすることを整理して、大事なことを落とさないように話すこと。

読むこと

第1学年

(ア)はっきりした発音で簡単な事柄を正しく音読すること。

(イ)簡単な事柄について文の内容を考えながら音読したり黙読したりする

第1学年

(ア)語句や文をはっきりと正しく音読すること。

(イ)質問、依頼などの文を読んで適切に応ずること。

こと。  
 (ウ)簡単な文の内容を理解して、それが表現されるように音読すること。  
 (エ)書かれていることの内容を全体としてまとめて読み取ること。

第2学年

(ア)はっきりした発音で、事柄の概要をとらえながら正しく音読すること。  
 (イ)文の内容の概要を考えながら音読したり黙読したりすること。  
 (ウ)文の内容の概要を理解して、それが表現されるように音読すること。  
 (エ)書かれていることの内容の概要を全体としてまとめて読み取ること。

第3学年

(ア)はっきりした発音で、事柄の要点をとらえながら正しく音読すること。  
 (イ)文の内容の要点を考えながら音読したり黙読したりすること。  
 (ウ)文の内容の要点を理解して、それが表現されるように音読すること。  
 (エ)書かれていることの内容の要点を全体としてまとめて読み取ること。

(ウ)数個の文の内容が表現されるように音読すること。

第2学年

(ア)文や文章の内容を考えながら黙読すること。  
 (イ)文や文章の内容を理解して、その内容が表現されるように音読すること。

第3学年

(ア)まとまりのある文章の概要や要点を読み取ること。

書くこと

第1学年

(ア)簡単な事柄の文を聞いて正しく書き取ること。  
 (イ)書こうとする簡単な事柄を整理して、大事な事を落とさないように書くこと。  
 (ウ)簡単な事柄について書かれていることの内容を読み取って、それについて簡単な事柄を書くこと。

第1学年

(ア)語句や文を正しく 書き写すこと。  
 (イ)語句や文を聞いて正しく書きとること。  
 (ウ) 伝えようとすることを 簡単な文で書くこと。

	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px;">第2学年</p> <p>(ア)文を聞いてその概要を正しく書き取ること。                      (イ)書こうとする事柄の概要を整理して、大事な事を落とさないように事柄の概要を書くこと。                      (ウ)書かれていることの内容の概要を読み取って、それについて概要が伝わるように書くこと。</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px;">第3学年</p> <p>(ア)文を聞いてその要点を正しく書き取ること。                      (イ)書こうとする事柄の要点を整理して、大事なことを落とさないように事柄の要点を書くこと。                      (ウ)書かれていることの内容の要点を読み取って、それについて要点が伝わるように書くこと。</p>	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px;">第2学年</p> <p>(ア)書こうとすることを整理して大事な事を落とさないように書くこと。</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px;">第3学年</p> <p>(ア)聞いたり読んだりしたことについて、その概要や要点を書くこと。</p>
語 彙	必修語 490語 扱う範囲 900～1050語	必修語 507語 扱う範囲 1000語程度まで
時 間	105時間/年間	105～140時間/年間

この表を見て気付くことは、「新学習指導要領」の目標では、1年生では「身近なこと」についてふれた英語に「親しむこと」そして「興味をもたせること」、2年生では、英語に「慣れること」、「意欲を育てること」、3年生では英語に「習熟」し、「積極的な態度を養う」といった、きわめて段階的で生徒の発達に合わせたものになっている。また、目標においては、現行が「～することができるようにさせる」とあるのに対し、「新学習指導要領」では「聞いて（読んで）理解する」といったように単なる「聞く・読む」作業に留まらない点を強調している。

言語活動においても、現行では1年は「簡単な事柄」、2年は「概要」、3年では「要点」といった漠然とした表現を用いているのに対し、「新学習指導要領」ではより具体的な指示が明示されている。2年生の「自然な口調」というのでもわかるように、ネイティブとの交流ある

いは、実際場面での発話ができるようになることを目指しているのがわかる。

以上、コミュニケーション重視の傾向がこれから現場へ全面的に示されることを見てきたが、実際、現場ではどのような事を念頭に置いて、具体的な指導にあたっているのだろうか。次の章では、今の現場に於ける傾向を見ていく。

## 2. 中学校現場における指導と教育実習生に望まれること

学習指導要領の目標があって、社会の動向が決まるのではなく、社会のニーズがあって教育への影響があるのである。「受験に合格するような教育を！」といった一本槍ではなく、「使える」ことも今では強く求められており、これは既に学校の中に浸透しているように思われる。

筆者は現場からの声として、金沢市内外の中学校に「実習生に望むこと」として今後の教科教育法への手掛かりになるように、アンケートに協力してもらった。この中には、あくまでも「実習生に望むこと」とはしたものの、日頃教師たちが心掛けていることが反映されていて、大学における指導にヒントを与えるものである。

### 2.1. 中学校現場が実習生に望むこと

アンケートは日頃行事などで関わっている38校に依頼し、うち13校、34名の先生方から回答があった。答えて下さった先生方の内訳は次の通りである。担当学年が2学年にわたっている時は、便宜上（ ）内のようにどちらかに加えて扱った。

返答中学校数	13校	年齢	教職歴	担当学年
返答人数	34名	20～24 1名	1～4 6名	1年 9名
男	10名	25～29 5	5～9 6	2年 9
女	22名	30～34 9	10～14 4	3年 9
明記なし	2名	35～39 2	15～19 3	1,2年 2 (2年でカウント)
		40～44 2	20～24 1	1,3年 1 (1年でカウント)
		45～49 3	25～29 4	2,3年 2 (3年でカウント)
		50～54 7	30～34 6	明記なし 2
		55～60 3	35～40 1	
		明記なし 2	明記なし 3	

アンケート（以下の回答には複数回答あり）

#### 実習生指導について

このアンケートは実習事前、事後指導に役立てるための資料となるものです。お答えになれ



より実践的な英語科教育法への試案

る範囲で結構ですので、一番近いと思われる所に○をつけて下さい。(コメントがあればかつこ内にお書き下さい。)

**質問** 授業中にどれくらい、またいつ英語を使うべきだと思われますか。

	英語のみ				英語でして日本語で				日本語のみ				
	学年	1	2	3	?	1	2	3	?	1	2	3	?
始めと終わりの挨拶		8	8	11	2	0	0	0	0	1	0	0	0
復習		1	3	2	1	5	6	8	0	1	0	1	0
文法項目の導入		1	0	3	1	6	8	4	0	2	1	1	0
文法の説明		1	0	0	0	3	1	3	0	6	8	7	0
新出語の導入、練習		5	2	3	0	3	8	8	0	1	0	0	0
教科書本文の内容の導入		4	6	5	2	4	3	7	0	1	1	0	0
内容の説明		1	1	0	1	5	5	8	0	2	4	3	0
「書きなさい」 「繰り返しなさい」等の指示		8	8	11	2	0	1	0	0	1	1	0	0
ゲーム等の指示		3	2	2	0	4	6	6	0	3	2	1	0

その他の場面 (具体的に)

[2年] 可能な限り全部英語とする

[3年] ニュースや身近にあったことを英文で聞かせる

**質問** 本文の訳読はしたほうがいいですか。

学年	はい	いいえ	ポイントのみ	ケースバイケース
1年	1	3	2	1
2年	6	3	2	1
3年	6	3	1	1

コメント

[2年] ・要点をしっかり押さえる

・最後に確認必要。中の下位の生徒は、これによって救われる面が多い。

[3年] ・簡単なものはいらない (2名)

・パラグラフ毎

・ポイントのみ

・訳読の癖がつくと何もかもが分からないと理解できた気持ちになれない。

「類推」なども学習には重要である。日問日答、英問日答、英問英答、などを工夫して内容理解へ導くことも可能。

日 高 佐 紀 子

- ・ある程度の訳は必要だと思うが、訳することが授業の中心にならないように、さりと流す工夫をしている。

**質問** 内容理解はどのように行うべきだとおもわれますか。

	1年	2年	3年
英語で質問し英語で答えさせる	5	5	6
英語で質問し日本語で答えさせる	0	1	4
日本語で質問し日本語で答えさせる	1	1	1

その他

〔1年〕

- ・段階的に（日－日でのQ&A、英のT－F、英－英）
- ・ケースバイケース （3名）

〔2年〕

- ・学年、または、題材によって、1・2・3の方法を使いわける。
- ・T－Fで （2名）
- ・ケースバイケース （4名）

〔3年〕

- ・段階的に（日－日でのQ&A、英のT－F、英－英） （6名）
- ・ケースバイケース （4名）
- ・前後の関係から内容をつかませる。
- ・T－Fで （1名）
- ・個人差で
- ・テープを聴かせて、全体の流れを大掴みにする→難解な文は平易な文に書き換えて空所補充等色々あると思う。
- ・ワンパターンにならないよう、題材によって方法を変えている。

**質問** 教壇実習以前にこれだけはしてほしいという事全てに○をつけて下さい。

	1年	2年	3年
1. 生徒の興味、関心、環境を把握する	4	3	6
2. 学校の行事や様子を把握する	4	3	3
3. 既習語、文型をつかんでおく	7	9	9
4. 中学校での教師の日頃の授業の進め方を知っておく	4	4	3
5. 体力や発声に注意しておく	5	4	6
6. フラッシュカードやピクチャーカードの使い方を身につけてくる	5	3	2

7.その他

〔2年〕

- ・指導案を書く。
- ・正しいアルファベットが書ける。
- ・参観授業を事前にする。
- ・全面的に担当教諭に頼るのではなく自分なりに教材研究について学習したことを少しは出せるように準備してほしい。
- ・積極的に生徒と接する。授業以外の活動で話しかけていく姿勢の必要性。

〔3年〕

- ・できれば多人数の中で話す事に慣れてほしいし、少なくとも実習中は、プロとしてやるわけでそれなりの心構えを持ってほしい。

**質問** 実習生にプリントを作らせるとしたら、どのようなものをポイントとして作らせませるか。

	1年	2年	3年
1.文法中心（ポイントと練習問題）	2	6	5
2.教科書の内容に沿った総合的なもの	4	4	5
3.文化的な内容のもの	0	4	0

4.その他

〔1年〕

- ・文型プリント
- ・自己表現のためのもの
- ・実習生が重点を置いた所のプリントであればいずれでも可。

〔2年〕

- ・活動に使う絵など

〔3年〕

- ・既習文型を使って
- ・自己表現能力をつけるもの
- ・1～3をとりまぜたもの

**質問** 今までの実習生が授業中にやって、良かったことを挙げてください。

〔1年〕

- ・生徒の興味をひく絵や例文をふんだんに使って授業を行ったのは良かった。
- ・自作の picture card の使用

日 高 佐 紀 子

〔2年〕

- 多くの生徒に活動の場を与えるような工夫があった場合はとても良かった。
- 生徒をひきつける絵を使った。プリントにも興味をそそる絵をあしらった。 (2名)
- 指示が明確で、積極的に授業に取り組み、創意工夫のあったもの。
- 上手な絵を書いてくれた。
- いっしょうけんめいなのでよかった。
- 自分の経験(海外研修等)を授業の中に取り入れて話をしたこと。
- 実物を使って、目と耳を使っての導入をしていたのが良かった。
- 自作の picture card の使用で生徒の興味を喚起し、実習生の意欲をみた。

〔3年〕

- 文型の導入で工夫されていたこと(三単現のsなど)。
- 将来教職につこうとして取り組む人の授業は粗削りでも素晴らしく、こちらが学ぶべき点が多い。
- 自作の絵が好評のように思います。
- いろんな英語を使ったゲームをやらせてくれたことや、自分が海外へ行った時の体験談をしてくれたこと。欲を言えば、そういうことをするにしても、きちんとした指導計画のもとにされれば生徒にもっと伝わるものがあると思う。

質問

今までの実習生が授業中にやって、困ったことを挙げてください。

(下線は筆者によるもの)

〔1年〕

- 文法説明に終始したり、くどい説明は必要ないと思う
- 予定通りに進まず、やれることだけやった、またクラスによってやった事やらない事がまちまち。
- 繰り返して練習させない
- 生徒の理解度の把握不十分
- “TV is on my head.”と教えて生徒に何度も言わせていた。
- Sが it など無生物の時、動詞に三単現のsがつくことを、実習生が知らなかった時。
- 後で実習生に説明してあげても、“自分は中学の時こう習った”と主張して譲らなかった時。

〔2年〕

- 文法事項ばかりを講義して、言語活動にはならなかった。
- 一つの事項を生徒が理解するために要する時間と説明の程度は人に言われてつかめるものではなく、かなり継続して教えた上でわかるものである。その点で授業のペースが速すぎたり説明不足や順序の誤りがでる時が困る。

- ・声小さく、生徒にわからせようとする（活動させようとする）積極的努力のないもの。
- ・将来教職につこうとしない実習生は、あきらかに授業にのぞむ姿勢がだらしないこと。
- ・声小さすぎたり、指示を明確にしない進め方。

〔3年〕

- ・間の取り方
- ・大きな声ではっきりと指示を与える。
- ・一斉指導、特に文法事項の導入はしっかりと、また個人指導をもおろそかにしない。
- ・発音はきれいなのですが、声小さいので、生徒は聞きづらいことがありました。
- ・文法的に間違った説明をしないように。
- ・どうしても文法説明に終わる授業。
- ・単なる資格取得のため、のような考え方の人の授業は、通り一遍で、余りメリットがない。
- ・少なくとも実習中は真剣に授業に取り組んで欲しい。
- ・予習不足
- ・板書の文字には注意されたほうがよい。

**質問** 実習生の指導にあたり、英語の授業をするときに何に一番注意してほしいですか。

〔1年〕

- ・生徒の学力（既習事項）をよくつかみそれに沿った練習問題を扱って欲しい。
- ・「ぜひ理解させよう」という情熱がほしい。
- ・実習生ばかりしゃべる。
- ・日本語の説明が多すぎ。
- ・口慣しの pattern practice や会話が少ない。
- ・授業というより授業以前のマナーや態度に困った事があります。実習生といえども生徒にとっては教師なので服装や態度、言葉使いなど気をつけてほしいし、せめて板書の字はマンガ文字にならないよう注意してほしいです。
- ・教師に本当になりたいと思わない者は、教育実習を安易に受けて欲しくない。

現場で邪魔になります。本当に希望している人は歓迎しますが…。

〔2年〕

- ・授業の組立、見通しをしっかり持つこと。
- ・準備したものを全部教えようとよくばらないこと。
- ・英語教育も人間教育の中の一つであるという姿勢で授業に臨んで欲しい。
- ・意味や使い方の理解にとどまらず、運用させることを主眼にしてほしい。
- ・貴重な授業を提供するのですから、ぜひとも教師になるつもりで実習に取り組んでいただきたいと思っています。
- ・1時間の授業構想を、事前に徹底的にやること（目標設定→活動→評価→指導過程）

日 高 佐 紀 子

- ・生徒を集中させてから説明する。

〔3年〕

- ・教科（英語）の指導のみにかく力を入れやすいが、英語を通しての学習で授業中の態度が悪ければ必ず注意すべきである（生活指導も大切である）。
- ・内容理解を中心とした総合的指導と、文法事項の理解、運用の面の指導とのバランスがとれること。
- ・内容理解にのみ重きを置くときれいに見えるが、上滑りをしている場合がおおい。かといって、文法指導のみをしても、コミュニケーションの面の向上は期待できない。両面がバランスよく向上していく指導法が現在期待されている。
- ・はっきり通る声で指示、reading などをする。
- ・いかに英語を多く聞かせ使わせるかを第一に考える。
- ・授業設計を考えるようにしてほしい。
- ・実習期間中は始業前の朝自習、昼食時、清掃時、行事等できるだけ生徒と接する機会を持ち生徒との人間関係を作る事が、授業でのベースになります。しかし、あまりになれすぎてしまうのも問題があります。教育する者とされる者とのそれぞれの自覚を見失わないこと。
- ・大きな声で、メリハリをつけて、授業をする。
- ・板書はていねいに。
- ・通り一遍ではなく、その人、その人のオリジナリティーが光るような授業をしてほしい。
- ・実習生は生徒にも近いので、子供の心をよく理解できると思うのですが、理解することと、許すということは同じではないと思うので、良いことは良い、悪いことは悪いと何事にも厳然とした態度で生徒に接して欲しいと思います。ややもすると、生徒を理解する、生徒の気持ちをくみとる、ということで、生徒の接し方が甘くなりがちなので、一言書かせてもらいました。
- ・話し方、声の大きさ、服装
- ・細かい文法的なことばかり、気にとられることがないように。大学の授業ではないのですから。

**質問** 大学における英語科教育法に望まれる事は何ですか。

〔1年〕

- ・板書の仕方
- ・指示の与えかたの徹底

〔2年〕

- ・基本的な指導案の書き方を指導しておいて欲しい。（2名）
- ・中学校での各学年の学習事項の概略（主として文法事項と言語材料）を把握しておいて欲

しい。

- 戦後大きな波であった pattern practice で文法指導してから、本文に入る。本文はちょっと読んで訳をする方式の授業は今の現場では、あまり生徒に合っていないと思われるのに、いわゆる古いタイプで文法文型中心の指導案だけを指導されて来ているように思われることもあります。(学生により、理解度もちがうのかもしれませんが) いろんなパターンの指導案を学習させてあげてください。
- 生徒中心の授業とはどのようなものか。
- 高等学校と異なり、専門的な知識はそれ程要求されないが、ゲームとか、歌とか、初級者に応じた技術的な力量を育成してください。

[3年]

- AET (英語指導員) との **team teaching** などネイティブとの協同指導の進め方などの研究をより一層充実していくことがこれからの本筋ではないかとおもいます。
- 言葉としての英語の教育法

これらの回答を見れば、学習者中心、コミュニケーション能力の向上、口頭作業の重視、場面や文脈の中での文法・文型の導入といった傾向に気付く。現場は、学力をつけてくることはもとより、文法と運用とのバランスよい生徒中心の授業をするよう強く学生に望んでいると同時に、彼らの授業が文法の説明に偏る事を指摘している。

## 2.2. 現場にみる指導過程

以上をまとめてみると、大筋で次のような指導過程が出来上がるのではないかと筆者は考える。

過程	指導内容	学習および指導活動
導入	英語で新出文法事項の紹介	実物など視覚に訴えるような場面を設定して既習語を用いつつ導入する。
展開	練習	新しい文法事項を用いつつ単語を入れ換えながら練習をする。
	本文の導入	絵を見せながら英語で、または日本語で説明したり、質問する。
	新出単語の導入	教師やテープの後についてリピート。意味の確認はケースバイケース。
	本文の内容理解	質問を投げかける。(日本語または英語で) 訳はポイントのみ。
本文の音読練習		
まとめ		内容や文法事項についての練習プリントやゲームをする。

日 高 佐 紀 子

これは、言うまでもなく、Oral Method と Oral Approach、そして Communicative Language Teaching を取り入れたものである。大学における授業ではこれらのもとの理論から押さえることも必要であろう。こうした形の授業について、羽鳥博愛は「英語教育」1989年12月号 pp. 14-15 の中で次のように述べている。

オーラル・メソッドには、オーラル・イントロダクションという段階があり、やさしい単語や構文を使って本文の内容をくわいて説明する。したがって、オーラル・メソッドというのは元来教科書の内容を分からせようという点に主眼がある。(中略)

パタン・プラクティスというのは、教えたいと思う表現や文法事項について、それを含むようなたくさんの文を作らせ、その言い方に慣れさせようという方法である。(中略)

日本ではオーラル・メソッドの方がオーラル・アプローチより早く英語教育に取り入れられ、その影響が非常に強かったために、オーラル・アプローチが紹介されるとパタン・プラクティスのように扱われ、そのあとで教科書の本文を読むような形ができあがってしまったが、パタン・プラクティスは必ずしも本文を読むこととは結び付かなくてもよいのである。

もし「パタン・プラクティス→本文の読解」と結びつけるとしたら、その本文はなるべく簡単なものでないと、パタン・プラクティスと本文の読解との間にギャップができてしまい、あまり効果的ではない。(中略)

パタン・プラクティスのあとに、オーラル・メソッドのオーラル・イントロダクションのような本文の「内容」についての導入が必要である。

このように、両者の特徴を生かした使い方を提言している。また「これからの教え方」として、生徒中心の指導法とは「みずから体験できるように何かをやりながら学習させるようにお膳立てしてやらなければならない」と述べ、今は丸暗記より生徒のクリエイティビティを發揮させる工夫が大切だとしている。筆者はその点でも、上記の3つの教授法が現場に貢献する所は大きいと考える。

この点については、短大生も同様で、講義の形をとっているうちは、いつまでも「英語を teach する人、つまり teacher」としての自覚を持たない。次章では、この点について触れ、本学の学生と教科教育法の在り方について考察する。

### 3. 実習生からみた教科教育法

まず、筆者がどのような指導項目と時間配当で授業を行ったかを示す。そのうえで、学生たちが理論や実践授業をどう受け止めたか、それらが彼らにどのように作用したかを示していく。

#### 3.1. 本学における実践

使用した教科書は大関篤英・高梨庸雄・高橋正夫による「英語科教育法」(金星堂)である。



より実践的な英語科教育法への試案

以下の表をご覧頂ければ分かるが、筆者は英語教育について必要な知識となる英語教育の歴史、様々な理論や教授法、つまり grammar-translation method から最近の理論や教授法にいたるまで把握させようと試みた。また、教育系の大学とは異なり、どのように教師として授業を進めるかについて日頃あまり触れない本学の学生には模擬授業を何回か行わせる必要があると考えた。結果、内容が盛り沢山になり、理論面で学生への定着が見られなかったと考える。また、実践についても、1人当たり3回行ったが毎回の反省や批判を戦わせる時間がなく、その点も今後の課題となると考える。次の表はその講義スケジュールである。(1コマ50分で2時間続き)

日付	内 容	留 意 点	教 具
4/17	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業方針</li> <li>・クラスルール</li> <li>・参観授業のこと(5/27か6/3のどちらかに附属中学校へ行く)</li> <li>・アンケートを書かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表を教室に掲示し書き込ませる。</li> <li>・プリントをあらかじめすっておく。</li> </ul>	
4/17	ビデオ鑑賞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・語学研究所のデモテープで授業の流れや生徒の動きに気付かせる。</li> </ul>	
4/24	英語教育の歴史と目的 pp.3~15 <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の英語教育の歴史的経緯</li> <li>・世界の外国語教育の現状</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・欧米・日本に於ける外国語教育の歴史を概観し、何故英語教育をするのかといった問題を考えさせる。</li> </ul>	プリント
4/24	英語教育の目的論 pp.16~27 <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国語教育の目的論</li> </ul>		
5/1	教科書(教材)について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際の教科書を見せどんな配列になっているか、どんな観点で構成されているか考えさせる。</li> <li>・指導要領を参照させる。</li> <li>・教科書分析をしてくるように指示。(5/29まで)</li> </ul>	指導要領 中学教科書
5/1	教科書について pp.28~61 <ul style="list-style-type: none"> <li>・教材としての教科書</li> <li>・教材配列 ・諸問題</li> </ul>		

日 高 佐 紀 子

5/8	学習理論と教授法の成立 ・学習の法則 (speech circuit) ・動機付け ・心理的学習因子 ・教授法の成立	指導法の前に知っておくべき項目を挙げておく。	
5/8	戦前の教授法 pp.66~77 ・文法・訳読式 ・オーラル・メソッド ・直接教授法		プリント
5/15	戦後の教授法 pp.78~97 ・オーラル・アプローチ ・認知学習理論 ・Graded Direct Method		
5/15	その他の教授法(今後) pp.98~122 ・Communicative Approach ・Humanistic Approach ・その他		
5/22	授業の進め方 pp.123~170 ・指導計画の作成 ・学習指導案の説明		
5/22	teaching plan の作成	実際に教科書を使って	
5/29	実践授業(1組20分)×4=8人 2人1組	授業者の反省と互いの指摘のしあい	教案は毎週出す
5/29		「学力不振はどうして起きるか」 (レポート提出)	
6/5	実践授業(1組20分)×4=8人 2人1組	「授業をどう評価するか」 (レポート提出)	
6/5			
6/12	実践授業(1組20分)×1=2 12 実践授業(1人10分)×6=6	「望ましい英語教師とは」 (レポート提出) 導入と文法の練習のさせかた	
12			
19	実践授業(1人10分)×8=8		
19			
26	実践授業(1人10分)×4=4 26 二回目(1人10分)×4=4		
26		本文の理解、まとめ、その他の活動	

7/3	実践授業(1人10分)×8=8		
3			
10	実践授業(1人10分)×6=6		
10	実践授業の反省、Q&A、 実習注意等		

## 3.2. 学生からのアンケート

次に、実習から帰ってきた学生たちにとってアンケートを見てほしい。

教科教育法と教育実習について

回答者16名(履修者17名うち1名体調不調のため途中から欠席し履修を終えられなかった。)

## 教科教育法について

1. 理論は進み方が 速かった 14名 ちょうどよい 2名
2. いつも予習してきた はい 0 いいえ 16
3. 理論はよくわかった はい 0 まあまあ 16 全くわからなかった 0
4. 一番印象に残っている理論は？
  - オーラル・アプローチ(パターン・プラクティスと書いた者を含む) 9
  - 無回答(忘れた) 7
5. 実際の授業に使えた理論は？ (複数回答あり)
  - オーラル・アプローチ(パターン・プラクティスと書いた者を含む) 5
  - 文法・訳読式 2
  - その他 3
  - 無回答 8

## 模擬授業について

(以下、人数の書いていない意見は1名の意味)

1. 模擬授業をしてどんなことを感じましたか。
  - ・準備してもその通りにはいかない。
  - ・生徒が違うので全然違う。
  - ・自信がついてきた。
  - ・聞くのとやるのでは全然違う。
  - ・人に教えるのは大変難しいし、恥ずかしい。
  - ・調べるのが大変だった。
  - ・役に立った。
  - ・人の前に立つことと、教師自身の準備の大切さがわかった。

日 高 佐 紀 子

- ・生徒に興味を持たせる工夫の難しさがわかった。
- ・実際に教えるのは難しい。
- ・視線が冷たく感じる。
- ・不安になった。

2. 実習で模擬授業での経験は役立ちましたか。 はい 14 いいえ 2

理由と内容は？

〔はい〕

- ・ピクチャー・カード、教案を作り、大切さが分かったし、実践力がついた。 5
- ・人の意見を聞いて役に立った。 6
- ・前もって（教科書の教えた所の）話が分かっていたのが良かった。
- ・自分の事として考えられるようになった。
- ・頭の中と実際とは違い、色々な場面を考えておく必要がある。
- ・模擬授業のビデオが役に立った。
- ・生徒への対応の仕方や悪い所を直してもらえた。
- ・慣れることができた。

〔いいえ〕

- ・全然雰囲気違ったし、心がまえも違う。 2

3. 模擬授業のやり方について意見があれば自由に書いて下さい。

- ・なるべく自分が先生になったつもりでやるとよい。
- ・生徒となる仲間に常に正解を言わせない。
- ・VTR が良かった。
- ・生徒に他のエキストラを使う。
- ・毎回意見交換をするのがよい。
- ・時間をもっと長く取ってほしい。
- ・このやり方でよい。 2
- ・2人でやるのは不必要。
- ・もっと多くしたかった。

教育実習について

教授法について

1. 先生のいつもやっている通りにしましたか。 はい 10 いいえ 4 無回答 2

2. 授業中にどれくらい、またいつ英語を使いましたか。( )は中学校教師によるアンケート結果の数

より実践的な英語科教育法への試案

	いつも	半々	日本語のみ
始めと終わりの挨拶	15(29)	0( 0)	1( 1)
復習	6( 7)	9(19)	1( 2)
文法項目の導入	7( 5)	5(18)	4( 4)
文法の説明	0( 1)	5( 7)	11(21)
教科書本文の内容の導入	4(17)	9(14)	3( 2)
内容の説明	0( 3)	10(18)	6( 9)
「書きなさい」、「繰り返しなさい」等の指示	9(29)	5( 1)	2( 2)
ゲーム等の指示	1( 7)	3(16)	9( 6)

その他の場面（具体的に）

- ・指名は英語で
- ・ Please help me. や Please wait. など
- ・復習をかねて、自己紹介

3. 本文の訳読はしましたか。 はい 11（「はい」、「ポイントのみ」と「ケースバイケース」の合計で21）

いいえ 5 (9)

4. 内容理解は？

英語で質問し英語で答えさせる 9(16)

英語で質問し日本語で答えさせる 2( 5)

日本語で質問し日本語で答えさせる 5( 3)

5. 授業をするにあたって次の時どのような形で行いましたか。

5.1.復習

- ・パタン・プラクティスをする。 2
- ・英問英答をする。 2
- ・前の授業のピクチャー・カードを使う。 2
- ・文法事項の応用の作文をする。
- ・セクションごとに review のプリントをする。
- ・フラッシュ・カードで文の作り変えの口頭練習をする。
- ・key sentence の入った英文のプリントをする。
- ・テープを聞かせQ & Aをする。 2
- ・人形やカードでQ & Aをする。
- ・暗唱とスキットをさせる。

5.2.文型導入

- ・ be going to と進行形を照らし合わせつつ。

- いきなり英問、その後説明 2
- ピクチャー・カードや実物を使って（英語で） 5
- 新しい文型を示して、説明 3
- 本文に出てきて確認
- 5.3. 文型練習
  - パタン・プラクティス 6
  - 英語でQ & A
  - ピクチャー・カードや実物で 4
  - 例文を英作させる
  - repeat させる
- 5.4. 新出語の扱い方
  - フラッシュ・カード 7
  - 英問に取り入れる
  - repeat 3
  - 意味を言う
  - 発音だけ
  - 発音のポイントを注意する
- 5.5. 本文の導入
  - 日本語でポイントを示してテープを聞かせる 4
  - ピクチャー・カードを使って
  - バックグラウンドの説明 4
  - 物を使って
  - 本文を書かせる
- 5.6. 本文の理解
  - 内容把握 2
  - ポイントを訳す 4
  - 質問で確認する 7
  - 口頭練習
  - ピクチャー・カード
  - 漠然と
  - hearing test や場面の設定で
- 5.7. 発音練習と音読
  - repeat 12
  - skit
  - カード

- ・発音の仕方を説明
- ・グループ毎に練習

5.8. ゲームは?            した 5    しない 7

- ・“Simon Says”をした
- ・他にも知っていると便利

6. プリントを作りましたか。            はい 9            いいえ 7

- |                     |        |
|---------------------|--------|
| 1. 文法中心 (ポイントと練習問題) | 4 (13) |
| 2. 教科書の内容に沿った総合的なもの | 1 (13) |
| 3. 文化的な内容のもの        | 2 (4)  |
| 4. その他              | 3      |
| 数字の教え方              |        |
| 本文の穴埋め              | 2      |

#### 教材について

1. 全てすらすら教えられた    はい 3    いいえ 12    普通 1

2. 分からない所があった

- ・肯定文の中の any
- ・過去の話の主人公について話す時の時制
- ・人称代名詞
- ・疑問詞+to~の使い方

3. 自分がした工夫を書いてください。

- ・ピクチャー・カード    5
- ・生徒の興味を質問に加えた    2
- ・グラビアを使った
- ・語順入れ替えゲームをした
- ・板書の仕方
- ・机間巡視
- ・絵や人形    2
- ・リズムよく大声で英文を読む
- ・生徒が参加できるように    2
- ・地図
- ・歌を歌う
- ・プリント
- ・ノートへのコメント

日 高 佐 紀 子

教育実習以前にこれだけはしておくべきだと思ったもの全てに○をつけて下さい。

生徒の興味、関心、環境を把握する。	12(13)
学校の行事や様子を把握する。	8(10)
既習語・文型をつかんでおく。	13(25)
中学校での教師の日頃の授業の進め方を知っておく。	9(11)
体力や発声に注意しておく。	10(15)
フラッシュ・カードやピクチャー・カードの使い方を身につけてくる。	9(10)

その他

- ・実習簿の書き方を詳しく聞く。
- ・生徒への評価をすることを忘れない。
- ・シナリオを作る。
- ・教材研究をする。

〔その他の感想〕(下線は筆者によるもの)

- ・本当に時と共に教授法もずいぶん変わったのだと感じた。
- ・実践につながるポイントを押さえた授業が良い。
- ・予備知識がもっと必要。
- ・責任の重大さを理解する。
- ・ビデオが良い。
- ・英語をふんだんに使って授業を進めるやり方もあるけど、それには良い教師の養成が必要だと思った。
- ・練習を多くしないと、実際に教授法を使うことは難しいと思った。
- ・進み方が速かった。
- ・英語を違った角度から見れた。
- ・難しかった。
- ・役に立つけど時間が少ない。
- ・模擬授業がよかった。

まず、印象に残っている理論、使えた理論についての質問で「オーラル・アプローチ」のみが出てきたことについて考察する。

本学での一年次での Oral English(毎日50分で週5回)では、*Streamline* (Hertley & Viney : 1984) を使用して行われているが、これは1900年代以降に Palmer, A. S. Hornby らを中心としたイギリスの応用言語学者たちが発展させた Oral Approach/Situational Language Teaching (Richard & Rodgers: 31) の流れを汲むもので、オーラル・イントロダクションやパタン・プラクティスを多く含んでいる。もし、Nelson Brooks が用いた意味で oral/aural



practice を重視する直接教授法をひっくり返して Audiolingual Method と呼ぶならば、学生たちはこの方法を身近に体験していることになり、それだけに覚えやすかったのであろうと考える。このことから、理論も実際に体験してこそ理解できることが明らかになる。

教壇実習について、大半の学生は英語を使って授業したと各指導過程で述べているが、担当教諭からの批評をみると「日本語の説明が多い」と書かれており、この点で意識のずれが見られる。

学生達が実習に行くに当たっては、英語力を高める事が第一に大切であるが、〔その他の感想〕にもあるように、指導技術のみでなく、自分の英語力や英語そのものを見直すのに教科教育法が役に立っていることも見落としてはならない点だと考える。

中学校教師および学生からのアンケートを鑑みて、教育法のシラバスの方向について次のように考えた。(1)理論を必要最小限にまとめる。(2)実際に各理論にもとづく実践を通して体験させる。(3)学生達の実践についても毎回具体的な方向を与え、より実習で役立つものを提供するように工夫する。という3点である。

次の章では、筆者がしばしば理論とその提示の仕方、実践への方向づけについて触れる。

#### 4. 理論と実践

筆者はやはり今の日本に一番影響のある教授法は、Oral Method, Oral Approach, Communicative Language Teachingの3つではないかと考える。Richards & Rodgers (1986) は、Palmer の教授法を“Oral Approach”と呼び、“Situational Language Teaching”とともに扱っており、以下の表でも参考としてその意見を入れている。

また、本来 Fries の Oral Approach は Approach であって教授法ではないのだが、実際、教授法として design や procedure を持っていることから、あえて教授法と同様に比較していく。

	Oral Method	Oral Approach	Communicative Language Teaching
提唱者	H. E. Palmer	C. C. Fries	D. A. Wilkins
年代	1900年～1920年代	1950年代	1960年代
背景	・19世紀まで外国語教授の主流をなしていた文法・訳読中心主義の教授法が教育方法的にも学習心理的にも矛盾や欠陥が	・耳によって受け入れ、これに基づいて口によって発表する学習法で、直接法の系列に分類できる学習法をいう。アメリカ	・それまで扱われてきた場面シラバスや文法シラバスが、共にコミュニケーションの能力を学習者に習得させるには不十分であるとし

	<p>あることから音声言語中心の学習が強調されるようになり、学習の過程において直接その外国語を通して学習させようとするものがいくつかでうちのひとつ。</p>	<p>構造言語学と行動主義心理学に影響を受けている。留学生のドロップアウト対策で目をつけられたものの。</p>	<p>て、意味論に基づく概念の範ちゅう化を核とする notional syllabus に基づく。</p>
<p>言語観</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語を「運用としての言語」(language as speech) と「体系としての言語」(language as code) に分け、外国語教授の目標は言語の実際の使用 (speech) であるとした。</li> <li>・さらに言語を4つの領域に分け、「聞く」「話す」を第一伝達、「読む」「書く」を第二伝達とした。</li> <li>・構造は言語の中核にある、と考えられるので、構造についての知識はその構造が使われる場面と結びつけられねばならない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1950年代の structural linguistics の言語観にもとづく。</li> <li>1. 言語行動は社会的習慣的行動</li> <li>2. 言語はし意的な記号体系</li> <li>3. 言語の構造は、言語を構成する要素間の対立関係 (contrast) によって決まる。</li> <li>4. 言語の本質は音声。言語の構造は音韻、形態、統語のレベルから成っており、これらの複合体を段階別にして、簡単なものから教えていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語はコミュニケーションのためのものである。</li> <li>・言語能力は形式や意味の知識も大切だが言語運用能力の一部でしかない。</li> <li>・一つの機能を示すのに様々な形式が用いられることがあれば、一つの形式で多くの機能を示すこともある。</li> </ul>
<p>学習観</p>	<p>(共通の項目)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. habit formation: 言語の習得は知識ではなく、習慣としての技能である。</li> <li>2. 習慣形成のための反復練習が必要である。</li> <li>3. 限られた語いの範囲内で音組織を習得し、構造上の道具を自動的習慣とした時に外国語を習得したことになる。</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児が言語を習得していく過程と同じであるという見方。 (言語習得の5習性)</li> <li>1. auditory observation</li> <li>2. oral imitation</li> <li>3. catenizing</li> <li>4. semanticizing</li> <li>5. composition by analogy</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションとして意味をもつ活動をすることによって学習者の学習が促進される。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大きな文の中の小さな言語構造を着実に積み上げて学習することによって、大きな文を理解することができる。</li> <li>・新しい習慣を形成することによって母国語の習慣を取り除くことになる。 Practice makes perfect. の考えに基づく。</li> <li>・言語学習の5段階</li> </ul>

		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. recognition</li> <li>2. imitation</li> <li>3. repetition</li> <li>4. variation</li> <li>5. selection</li> </ol>	
目 的	<ul style="list-style-type: none"> <li>• practical command of the four basic skills of language</li> <li>• automatic control of basic structures and sentence patterns (Richards &amp; Rodgers: 36)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 生徒がその言語の基礎的な材料を完全に学習し、それを普通の会話の速度で口頭で発表でき、さらにこれらの材料が同じ速度で話された時、それが理解できるようになること。</li> <li>• 基本的な構造やセンテンス・パタンを淀みなく自動的にコントロールできるようになること。</li> <li>• 4技能における実際的な運用能力をつけること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• コミュニケーションは社会的行動であるから、言語を習得するということは、言葉を使って社会的行動ができるようになることである。</li> <li>• 与えられた社会的環境で正しく言語を使うといった意味でのコミュニケーション能力を学習者がつけること。</li> </ul>
シラバス	(共通項目)		<ul style="list-style-type: none"> <li>• structures, functions, notions, themes の配列は学習者のニーズに応じる。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 音組織の習熟をねらう。</li> <li>• 基本的文構造を代表する文型を、その文型と結びついた場面において反復練習により定着し、再びその場面に置かれた場合、自動的にその文型が表出できる程度に習熟する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 観念連合 association of ideas を背景に英語で考えさせる。</li> <li>→新教材の内容を既習材料との関連性を利用しながら、易しい語い、文、構造によって解説的な口頭導入を行う。</li> <li>• 教材配列は「易から難」の基準に基づく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 教材の選択・配列が科学的記述にもとづいている。</li> <li>• 絶対必要な文法構造のみを入れる。</li> <li>• 教材を互いに密接な関連関係にある、まとまった体系をなすよう配列し、最も容易な段階を経て、能率的に学習できるようにする。</li> <li>1. 構造分析 (音韻論・形態論・統語論)</li> <li>2. 日・英の構造の比較分析</li> </ul>

<p>学習者とその役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の英語による解説・説明を聞く。また、教師の発問をうけて応答するなどの受容を通じて発表能力を伸ばす。</li> <li>・初期においては、学習者はただ教師の言うことを聞き、リピートし、質問や指示に答えるだけで、学習内容については何も関与しない。</li> <li>・しばらくすると、互いに質問したり、人に反応を伝えるなどの積極的参加を求められるようになる。</li> </ul>	<p>3.日本人の弱点を克服するような教材配列</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文型練習による発表を通じて受容面を広げる。</li> <li>・教師のモデルやテープを模倣し繰り返す。</li> <li>・教師の指示や様々な質問に極力速く正確に反応する。</li> <li>・chain drills, role-playをダイアログの中ですることもあるが、教師中心である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意味を交渉するコミュニケーター。</li> <li>・与えられた時間を意味を交渉するために最大限に活用すべく相互に話すこと。</li> <li>・やる気があること。</li> </ul>
<p>教師とその役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・モデル、熟練したマネージャーとして、クラスをコントロールする。</li> <li>・教師の責任は</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. timing</li> <li>2. oral practice to support the textbook structures</li> <li>3. revision [i.e.review]</li> <li>4. adjustment to special needs of individuals</li> <li>5. testing</li> <li>6. developing language activities other than those arising from the textbook</li> </ol> <p>(Richards &amp; Rodgers: 39)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の態度についてすべて指示、コントロールをする。</li> <li>・生徒の良き手本になることが大切。</li> <li>・生徒の誤りは極力避けられるべきであり、そのように考慮して指導する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習者の学習のファシリテーター</li> <li>・コミュニケーションが実際に起きるような場面を作る。</li> <li>・学習者の質問に答える助言者であり活動しているときのモニター。</li> <li>・needs analyst</li> </ul>

<p>教材とその役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音声面と同時に場面を重視</li> <li>a) 実物</li> <li>b) 絵</li> <li>c) 動作</li> <li>d) 行動</li> <li>・教科書</li> <li>・視聴覚教具</li> <li>・教科書は様々な文法構造を体系的化したもので、段階的に十分吟味されたもの。</li> <li>・視聴覚教具はこれに合うよう作られ、提示される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい語い・構造はダイアログを通して示される。</li> <li>・文法は示された例から誘発されるもので、文法ルールのみを引き出して説明しない。</li> <li>・分析によって出来た教材のうち、新教材は小さな段階 successive small steps of contrast を通して導入される。</li> <li>・文型中心</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習者に実際ネイティブ・スピーカーが使っている言語を理解するストラテジーを身につける機会を与えるようなオーセンティックな教材</li> </ul>
<p>活動の形態</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. listening practice</li> <li>2. choral imitation</li> <li>3. individual imitation</li> <li>4. isolation</li> <li>5. building up to a new model</li> <li>6. elicitation</li> <li>7. substitution drilling</li> <li>8. question-answer drilling</li> <li>9. correction</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英問英答をあらかじめ設定された文型を定着させる指導技術として使う。</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. oral introduction</li> <li>2. contrast</li> <li>3. mim-mem</li> <li>4. identification</li> <li>5. reading</li> <li>6. writing</li> <li>7. pattern-practice</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>・真似と繰り返しによってダイアログを暗記する。</li> <li>・repetition, back-ward build-up, chain, substitution, transformation, question-and-answer といったドリルはダイアログに示されたパターンに基づく。</li> <li>・oral/ aural drills にもっとも注意が払われ、minimal pairs などを使って発音をL.L. で教える。</li> <li>・定着した文型及び文例を、それぞれの場において的確に使いこなせるように対話の作業 (pupil-pupil dialog) を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次の三つの特徴を持ったアクティビティをする： information gap, choice and feedback</li> <li>・学習者は小さいグループで活動する。</li> </ul>

<p>その他</p>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・文化について：</li> <li>1.人々の日常生活</li> <li>2.コミュニケーションに必要な要素の一つ</li> <li>・概念や機能を重視することにより、言語形式を体系的に指導しにくい点で日本の現状と食い違う。</li> <li>・母国語の使用ができない。</li> <li>・種々の活動ばかりでなく宿題の指示なども英語でする。</li> <li>・評価は正確さと流暢さを重視。 communicative test を行う。</li> <li>・間違いは許容される。</li> <li>・授業に生かせるもの： scrambled sentences, language games, picture strip story</li> </ul>
------------	--	--	---

今後、これらを実際学生に示すにあたり、それぞれ検定教科書を用いて実演、体験させてみたいと思っている。その結果については次回の折りに発表したいと考えている。

### 5. ま と め

教授法に最上のものは無いと言う。その一方、多くの人々が試し、経験してきて better であるという教授法があることも確かである。要は、その学習者にとって、効果的か効果的でないか、有効か有効でないかということである。様々な地域、環境、生徒を考えた時、教科教育法も大本だけを教え後は学生に任せるといった考え方のほうが確かにとうを得ているかもしれない。しかし、時間的制約や受け身の授業に慣れている学生に実践への橋渡しをしてやる必要があるのではないだろうか。

学習者の興味・関心・態度・能力・教室での学習活動の形態をふまえた上で外国語をコミュニケーションの手段として役立てるためにも、場面シラバス・概念シラバスをどう調和させていったらよいのかをより定着させることのできる教育法を研究・実践していく必要性をますます感じている次第である。

**The List of Works Cited**

- Doff, Adrian, *Teach English—Trainer's Handbook*. Cambridge University Press (1988).  
— — —, *Teach English—Teacher's Workbook*. Cambridge University Press (1988).  
Larsen-Freeman, Diane, *Techniques and Principles in Language Teaching*. Oxford University Press (1986).  
Long, Michael H. & Jack C. Richards, ed., *Methodology in TESOL*. Newbury House (1987).  
Richards, Jack C. & Theodore S. Rodgers, *Approaches and Methods in Language Teaching: A Description and Analysis*. Cambridge University Press (1986).  
青木庸效著「英語科教育」英宝社 (1988)  
伊藤健三・伊藤元雄・下村勇三郎・渡辺益好著「実践英語科教育法」リーベル出版 (1985)  
大沢茂・安藤昭一・成田義光・黒田健二郎著「現代の英語科教育法」南雲堂 (1978)  
大関篤英・高梨庸雄・高橋正夫著「英語科教育法」金星堂 (1983)  
小川芳男他編「英語教授法事典」三省堂 (1982)  
垣田直己編「英語教育学研究ハンドブック」大修館 (1979: 1982)  
Johnson, Keith & Keith Morrow 著「コミュニカティブ・アプローチと英語教育」小笠原八重訳 桐原書店 (1984)  
多田房子著「外国語としての英語教授法」南雲堂 (1978)  
橘健著「英語教育のアイデア」大修館 (1980)  
田崎清忠著「英語教育理論」大修館 (1978)  
「中学校指導書」文部省 (1989)  
羽鳥博愛著“教科書の扱い方の工夫” 「英語教育」no. 19, 1989年12月号 大修館 (1989)